

## 第2章 八上城跡を取り巻く環境

### 1. 自然的環境

#### (1) 丹波篠山市の位置

丹波篠山市は兵庫県の中東部に位置しており、総面積は377.59km<sup>2</sup>、東は京都府、西・北は兵庫県丹波市・西脇市・加東市、南は大阪府、兵庫県三田市・猪名川町などに隣接している。舞鶴若狭自動車道の開通やJR福知山線の複線化によって、関西経済圏の大阪・神戸からの時間的距離が大幅に短縮され、1時間圏域となっている。

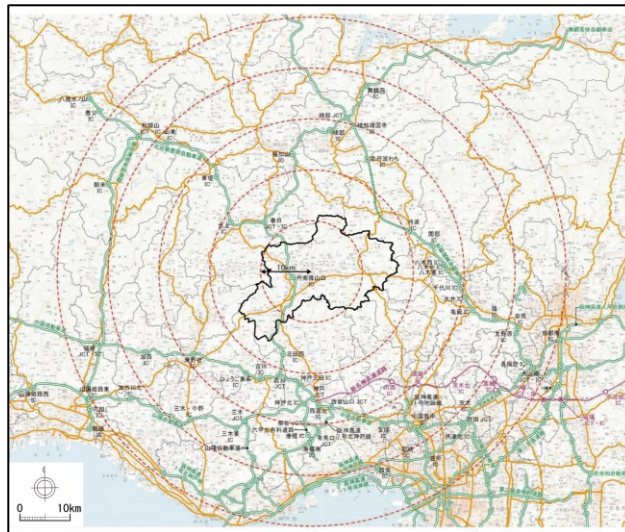


図 2-1 丹波篠山市の位置

#### (2) 地形・地質

##### ①地形

丹波篠山市は山地が市域の約75%を占める。市域北部には多紀連山、市域南部には深山山地が連なり、標高500～800mの山地及び丘陵地に囲まれ、市域中央部には標高約200mの篠山盆地が位置している。

多紀連山は、隆起と沖積作用によって土砂が堆積して谷筋が埋まり、山裾、山頂とも急峻な稜線となっており、「岳」、「嶽」、「多紀アルプス」などとも呼ばれる。また、起伏のある岩場が多く、古代には修験道の聖地となり、「三嶽」、「西ヶ嶽」、「小金ヶ嶽」の三峰をめぐる行場があり、一時は奈良県の大峰山と競うほど行が盛んであったといわれる。

篠山盆地に接して、標高300～500mの前山や丘陵地がある。これらの山地には、「丹波富士」と称される高城山に築かれた八上城跡をはじめとして、中世から戦国時代にかけて多くの山城が築かれている。また、篠山盆地には、権現山や前山、馬地山、東城山等の小丘が点在し、その景観を特徴付けている。市域の中心地である篠山城跡(笹山)も元来丘陵地であった。

篠山盆地は、取り巻く山稜によって4～5km圏の視覚領域を構成している。比高から考えると、人は見上げることなくまっすぐ正対した状態で、こんもりとした山容や、季節によって山稜の樹冠までもが目視されるスケールの空間となっている。季節や気象変化によって醸し出される多様な様相の山容は、本市の景観を特徴づける重要な要素となっている。

扇状地は山麓部や山地の谷筋に分布しており、農地や集落が形成されている。

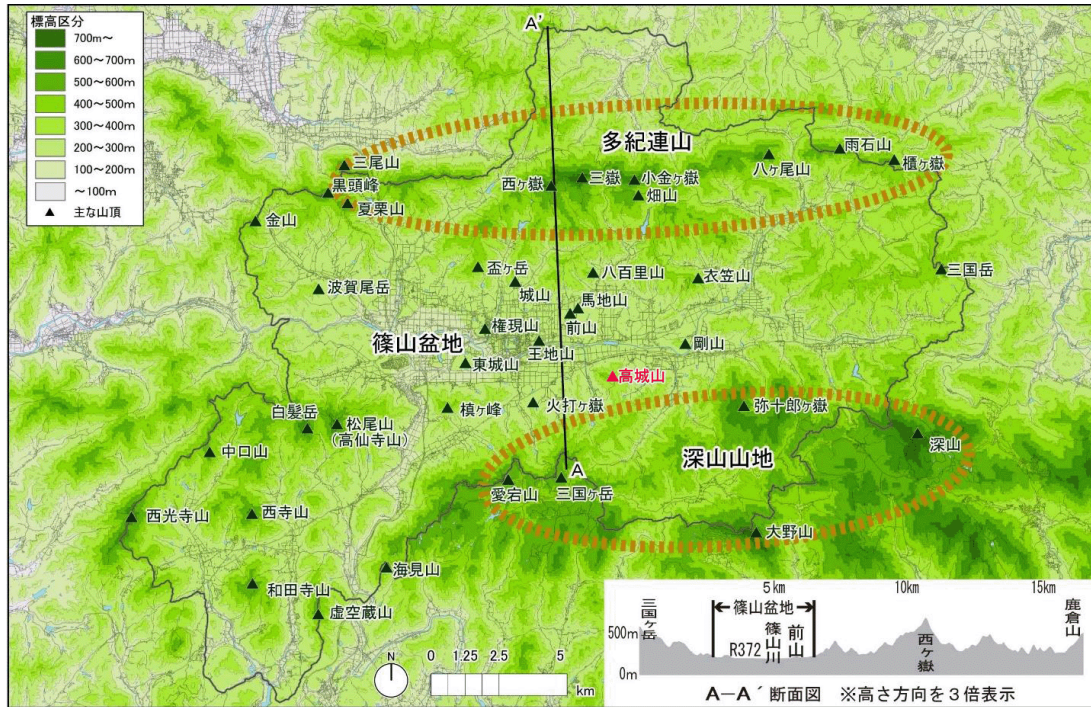


図 2-2 丹波篠山市の主な山頂  
資料：SRTM(スペースシャトル地形データ)より一部加筆

## ②地質

市域中央部から東部の山地の大半は、古生代から中生代ジュラ紀に生成された丹波層群(丹波帯)に属し、粘性岩・頁岩・砂岩・チャート・輝緑凝灰岩から構成される。

篠山盆地の平地部に島状に点在する多くの孤立丘陵と盆地周縁部の丘陵は、中生代白亜紀に生成された礫に富んだ凝灰質が多い篠山層群で、礫岩・頁岩・泥岩・砂岩から成る。篠山層群下部層では、日本最古とみられる白亜紀前期のほ乳類化石を含む小型脊椎動物の化石や丹波市を中心に大型草食恐竜「丹波竜」の化石等が発見されている。なお、篠山盆地は太古、淡水湖であったといわれ、岸边や湖底に生息していた貝類の化石類が発見されている。特に玉地山の「漣痕と貝の這い跡」は、市指定天然記念物になっている。また、篠山層群からはカイエビ類の化石も見つかっており、現在も現生カイエビを市内の水田で見ることができる。

阿草断層を境とする市域西南部は中生代白亜紀後期に生成された有馬層群(生野層群)と呼ばれる地層に属し、中生代白亜紀に噴出した火山岩である流紋岩質凝灰岩・流紋岩溶岩・流紋岩質溶結凝灰岩からなる地層である。これらの岩石は建築用石材に使われ、古くは篠山城築城の際に使われており、当野地区には本市が史跡に指定している集石場が存在している。

篠山川、靱井川、羽束川などの河川流域の低地部は、砂礫、泥、粘土層を主とする沖積世から洪積世の堆積物で構成され、河川周辺の段丘や扇状地、山麓緩斜面では未固結の礫層を主体とする地層となっており、市街地、集落地、農地の大半がこれらの未固結堆積物の地層の上に形成されている。



図 2-3 丹波篠山市の表層地質図

資料：20 万分の 1 土地分類基本調査(表層地質)、丹波篠山市の文化財より一部加筆

### (3) 気候

丹波篠山市の気候は、典型的な内陸盆地の気候であり、気温の日較差と年較差が大きく、冬の寒さが厳しい。さらに年間を通して風が弱く、秋から冬にかけて霧の発生が多い。

雲海は放射冷却の影響で空気中の水分が霧となり、盆地や谷底にたまり発生するもので、日中と夜の寒暖の差が大きい時にでき、本市でもよく見られる自然現象となっている。秋は朝晩の気温がぐっと下がって霧が深くなるが、篠山の特産である山の芋は「霧芋」とも呼ばれ、山の芋が育つには、この気温が一番よい条件とされる。

令和元年度(2019)の平均気温は 15.0℃(柏原観測所)、年間降水量は 1,128 mm(柏原)、1,511 mm(後川)であった。なお、例年 12 月初旬から 3 月初旬にかけて降雪が観測されている。また月別の最高気温・最低気温(令和元年度(2019))をみると、最高気温は 36.6℃(7、8 月)、最低気温は-8.2℃(2 月)となっている。

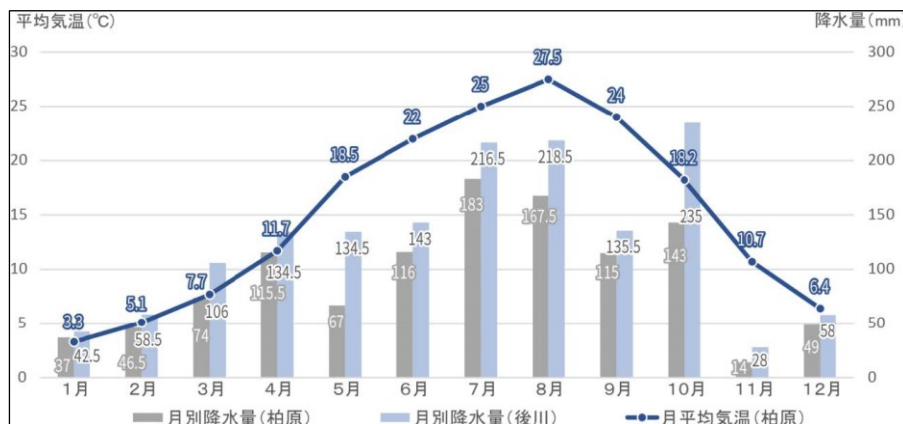


図 2-4 月別降水量・月平均気温(2019 年)

資料：気象庁、柏原観測所(丹波市柏原町)及び後川観測所(丹波篠山市後川上)  
※後川観測所における月平均気温のデータは無い。

#### (4) 植生

丹波篠山市の植生区分は、アカマツーモチツツジ群集が大半を占めており、集落周辺の里山は、特産品の一つである丹波松茸の産地となっている。本市の特徴的な自然植生として、以下があげられる。

- ・今田地区今田町上小野原の住吉神社社叢には、モミーマカガシ群集が残されている。
- ・城南地区真南条上の龍蔵寺のある愛宕山の山頂部に近い勝軍地藏堂周辺や忍の滝周辺は、シダ類など豊かな植物相を形成している。
- ・今田地区の城山稲荷神社や稲荷神社及び和田寺、高城山山麓の八上地区八上内の春日神社や八上地区八上上の弓月神社、日置地区の磯宮八幡神社背後の堂山、福住地区二之坪の熊野新宮神社、日置地区宮ノ前の波々伯部神社、雲部地区泉の八幡神社の周辺にはコジイカナメモチ群集、日置地区曾地中の八幡神社周辺にウラジロガシサカキ群集が存在する。
- ・今田地区今田町本荘の西光寺山山頂部には、本来海岸の臨海崖状地に分布するウバメガシ群集が分布しており、海岸から 30 km以上離れた内陸部に存在することは稀な植生とされる。
- ・畑地区火打岩から西紀北地区本郷にかけての三嶽・小金ヶ嶽の山頂部周辺では、アカマツーハナゴケ群集等の植生がみられる。

また、自然植生の他には、小金ヶ嶽・三嶽等の多紀連山の北方や南部の白髪岳から三国ヶ岳に至る一帯のコナラーアベマキ群集、盆地の中央部の大半を占める水田や一部の茶畑、果樹園、特産の丹波篠山黒豆などを栽培する畑地、谷筋や斜面下部を中心としたスギ・ヒノキ等植林などの植生がみられ、さらに山麓部の一部でのクリの植林が特徴となっている。

しかし近年では、マツ枯れに加えて、ナラ枯れ、竹林の拡大などが課題になっている。また今田地区の山麓部の湿地や池の岸边、城南地区小枕の馬口池の湿地にはサギソウやモウセンゴケ、タヌキモ等の食中植物などが自生していたが、減少又は絶滅に近い種も多い。さらに、多紀連山は、ホンシャクナゲ、ヒカゲツツジ等の冷温帯系植物がみられたが、近年、その数が減少している。一方、多紀連山の三嶽山腹ではクリンソウの自生地が発見され、保護活動が個人や団体、学校単位で進められている。

八上城跡が位置する高城山と法光寺山には、兵庫県版レッドデータブックに掲載されるような植物群落は見られない。

名称	区分	ランク
湿地性植物群落 (クリンソウ群生) (火打岩・三嶽)	滲正湿原	A
オグラコウホネ群落 (当野・武庫川)	川沼植生	A
モミ・アカガシ群落 (今田町上立杭・住吉大明神)	照葉樹林	B
ツクバネガシ群落 (曾地中・八幡神社)	照葉樹林	C
ウラジロガシ群落 (今田町上小野原・住吉神社)	照葉樹林	C
早春植物群落 (大山宮・追手神社およびその周辺)	個体群	C
アカマツ群落 (火打岩)	針葉樹林	C
アカマツ群落 (上篠見・篠見四十八滝)	針葉樹林	C
コナラ・アベマキ群落 (川原・ささやまの森公園内)	二次林	C

図 2-5 丹波篠山市内の主な植物群落(兵庫県版レッドデータブック掲載種)  
資料：兵庫県レッドデータブック 2020(植物・植物群落)

## 2. 社会的環境

### (1) 人口動態

丹波篠山市の人口推移をみると、平成 21 年(2009)には 45,352 人であったが、令和元年(2019)には 41,395 人となっており、この 10 年間で 3,957 人(減少率-8.7%)減少している。一方世帯数をみると、平成 21 年は、16,517 世帯であったものが、令和元年には 17,450 世帯と増加しており、一人世帯の増加や世帯分離が進行していることがうかがえる。

一方、将来推計人口をみると、令和 27 年(2045)には、28,229 人まで減少すると予測されている。年齢区分別の人口をみると、平成 11 年(1999)では、65 歳以上の割合が 23.7% であるが、平成 30 年(2018)には 33.7% と増加している。なお、同期間での 0~14 歳の割合の推移は、15.6%(1999)から 11.6%(2018)に減少している。八上城跡が位置する八上地区も、人口の増減率は-18.4%、世帯数の増減率は 7.4% で、人口減少と一人世帯の増加が進んでいると考えられる。

人口動態の特徴としては、J R 篠山口駅周辺や丹南篠山口インターチェンジ周辺の味間地区と城南地区では増加しているものの、市縁部における人口減少や少子高齢化が進行しており、令和 4 年(2022)、旧篠山町地域は過疎法による「過疎地域」に指定され、現在、「過疎地域持続的発展計画」に基づき、人口増加にむけた取り組みを進めている。



図 2-6 人口・世帯数の推移と将来推計人口

注)人口及び世帯数は各年 9 月末の値(住民基本台帳に基づく)資料：丹波篠山市統計書平成 30 年度版

区分	H11 (1999)		R1 (2019)		増減率	
	人口(人)	世帯数(戸)	人口(人)	世帯数(戸)	人口	世帯数
篠山	4,268	1,645	3,418	1,636	-19.9%	-5.0%
八上	2,570	825	2,097	886	-18.4%	7.4%
畑	1,347	408	938	413	-30.4%	1.2%
城北	3,281	1,043	2,827	1,163	-13.8%	11.5%
岡野	2,870	921	2,702	1,124	-5.9%	22.0%
日置	2,577	760	1,825	750	-29.2%	-1.3%
後川	644	177	403	172	-37.4%	-2.8%
雲部	1,185	365	834	362	-29.6%	-0.8%
福住	1,841	645	1,306	608	-29.1%	-5.7%
村雲	1,245	364	939	390	-24.6%	7.1%
大芋	1,196	377	761	348	-36.4%	-7.7%
西紀南	1,980	653	1,837	804	-7.2%	23.6%
西紀中	1,799	504	1,406	522	-21.8%	3.6%
西紀北	908	296	704	308	-22.5%	4.1%
大山	1,805	523	1,409	572	-21.9%	9.4%
味間	8,547	2,681	9,387	3,937	9.8%	46.8%
城南	2,745	830	2,995	1,178	9.1%	41.9%
古市	2,674	774	2,218	943	-17.1%	21.8%
今田	4,152	1,131	3,389	1,334	-18.4%	17.9%
総数	47,634	14,922	41,395	17,450	-13.1%	16.9%

図 2-7 地区別人口・世帯数の推移及び増減率(平成 11 年・令和元年)

資料：市民生活部市民課(各年 9 月末日現在)

## (2) 交通

丹波篠山市の主な交通網は、JR福知山線が南北に貫き、篠山口駅が主要駅となっている。また高速道路として、舞鶴若狭自動車道の丹南篠山口インターチェンジが玄関口となっており、国道173号、国道176号、国道372号などの幹線道路がある。八上城跡の北側は国道372号線が東西に走り、西は姫路方面、東は亀岡方面へつながっている。

バス路線は神姫グリーンバスが、篠山口駅などのJR福知山線の主要駅を拠点に市内を運行しているが、篠山口駅が市域の西側に位置していることや、バスの運行便数が少ないため、市内各地域の「歴史文化資産」への観光利用などのアクセスはやや不便となっている。

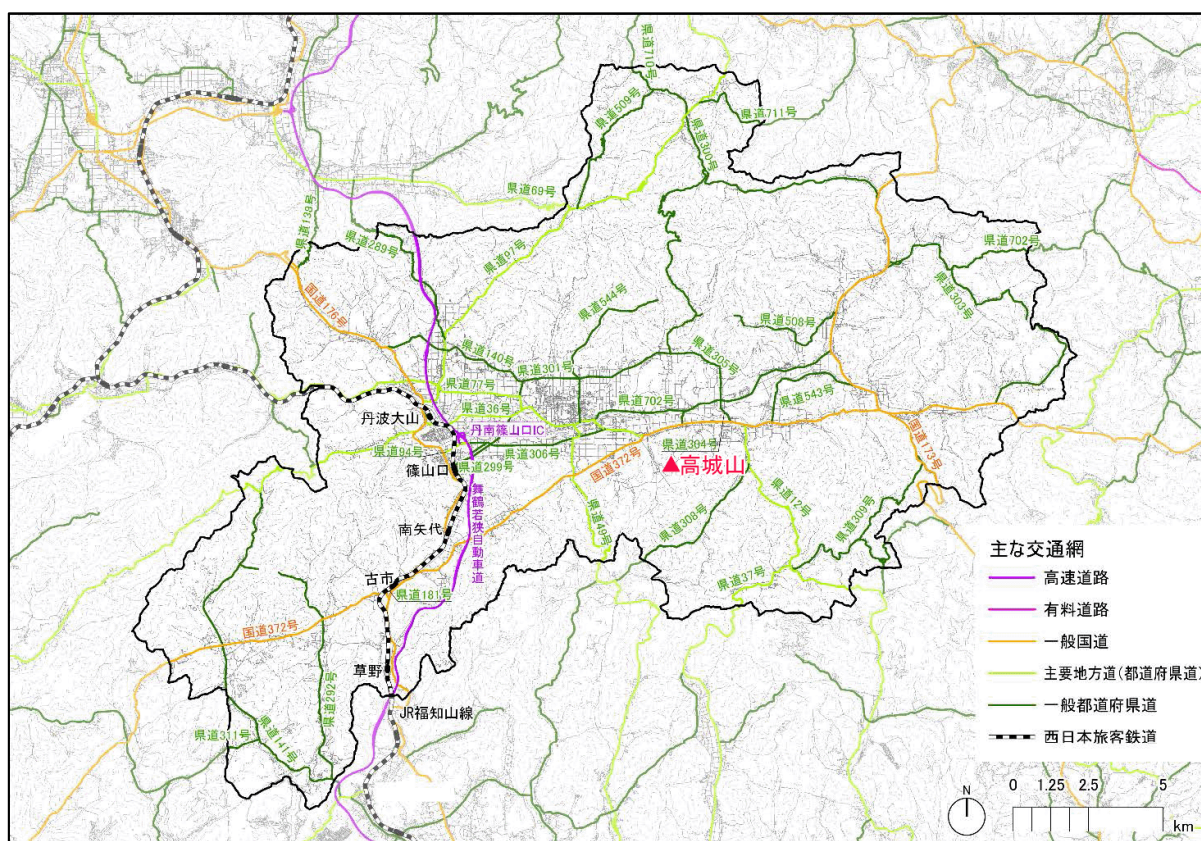


図 2-8 主な交通網

## (3) 産業

丹波篠山市の産業は、「丹波篠山」のブランドに示されるように、「丹波篠山黒豆」等の地域特産物を産み出す農林業が基幹産業となっていた。一方、昭和40年代以降の積極的な企業誘致により、酒造、薬品、金属等の製造業が中核的な産業として定着している。

農業は、稲作が中心であるが、全国的な知名度を得ている「丹波篠山黒豆」、「丹波篠山の芋」、「丹波茶」、「丹波栗」、「丹波篠山大納言小豆」、「丹波松茸」、「猪肉(ぼたん鍋)」、「丹波篠山牛」などの「丹波篠山」ブランドを象徴する特産品が本市の農業を特徴づけている。林業は、スギ・ヒノキ・マツを主として育成している。

#### (4) 観光

丹波篠山市における近年の年間観光客数の推移は、観光入込客統計に関する共通基準が導入された平成 22 年(2010)以降は 240 万人前後で推移しており、平成 30 年(2018)で約 242 万人となっている。本市は都市部からのアクセスが良いことも影響し、観光形態は日帰り客が 90%以上を占めている。

観光目的では、篠山城大書院、歴史美術館、青山歴史村、安間家史料館、陶の郷、兵庫県陶芸美術館の「施設見学」が「まつり」に次いで多く、「歴史資産」を活かしたまちづくりの効果が観光振興につながっていると見える。しかしながら、主要な歴史文化施設は篠山地区に集中しており、八上地区には観光客を誘致できる施設は特にない。

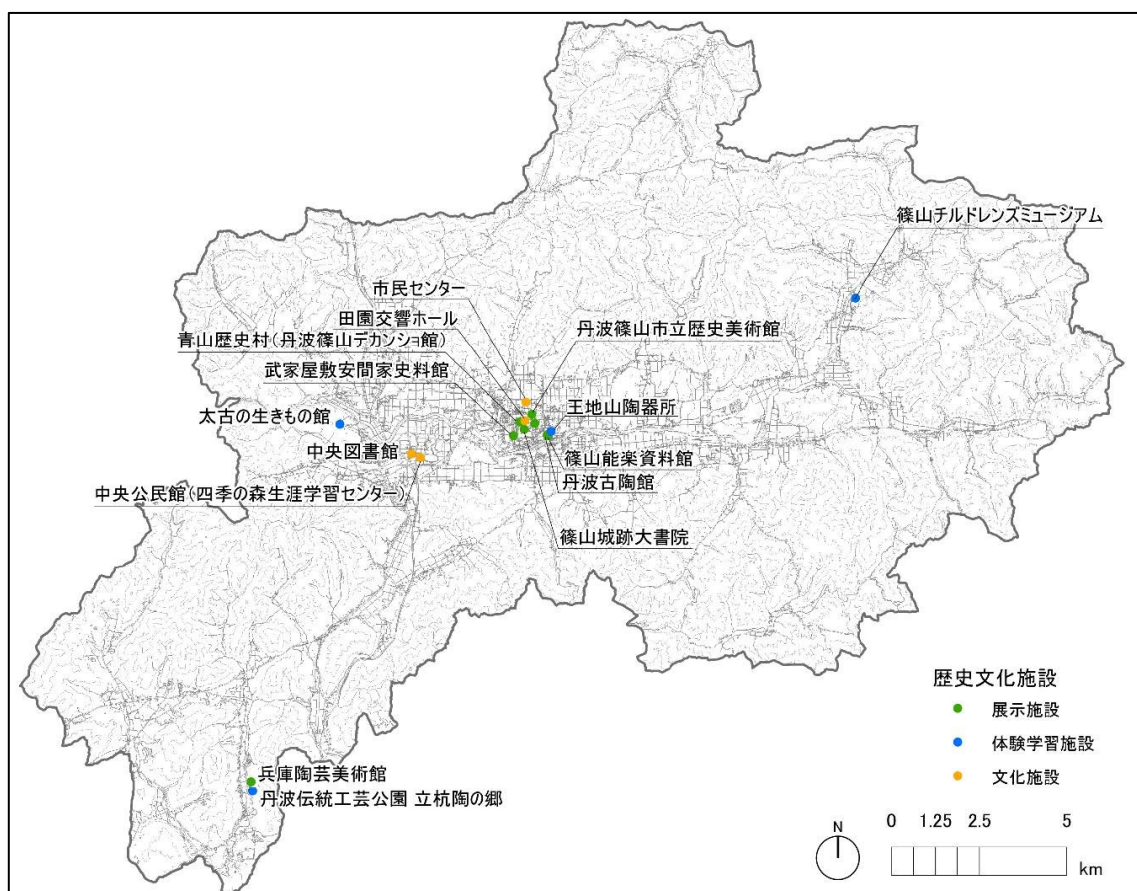


図 2-9 主な歴史文化施設の位置



写真 2-1 篠山城跡大書院



写真 2-2 武家屋敷安間家史料館



写真 2-3 青山歴史村

### 3. 歴史的背景

#### (1) 先史・古代

“丹波”の歴史は古く、古事記、日本書紀には、四道将軍の一人である丹波道主命の派遣の記述がある。雲部地区東本荘の雲部車塚古墳は、かつて丹波道主命の陵墓の可能性が指摘されたこともあったが、古墳の年代との相違から、現在は否定的である。また、丹波国造としては「丹波直」、市域にかかわる豪族としては「多紀臣」、「日置臣」、「榛原臣」の名前がみられる。

大化2年(646)の改新の詔により国郡制が定められ、律令制による11郡を管轄する“丹波国”が成立し、和銅6年(713)には北部の5郡を割いて丹後国が独立し、丹波国は桑田、船井、何鹿、天田、氷上、多紀の6郡となり(和名類聚抄、延喜式)、現在の兵庫県と京都府にまたがる丹波地域の区域となった。

古代条里制の遺構は篠山盆地の中央部の水田地帯に広汎に見られ、現在も三条山、六条の坪、西九条の坪などの地名が残っている。条里遺構の方位は概ね南北線に一致し、坪並みは千鳥式である。

この坪の設定は、西紀南地区川北、味間地区西吹、吹新及び杉ならびに大沢新、城南地区岩崎、城北地区沢田などに散見される。

郡内を通る街道は山陰道で、「延喜式」には、丹波国に8駅あったとされ、多紀郡では、福住地区小野奥谷・小野新付近の小野駅と、岡野地区西浜谷付近に長柄駅が設けられていたと考えられている。

#### (2) 中世

古代から中世にかけて全国各地で荘園が開設されたが、多紀郡においても数多くの荘園が確認される。篠山地域の郡家荘、岡屋荘、安行荘、三箇北荘、日置荘等、城東地域の畑(宗我部)荘、曾地荘、波々伯部保、後河荘、多紀地域の靱井荘、大芋荘、小野荘、草上荘、村雲荘、丹南地域の大山荘、大沢荘、西紀地域の宮田荘、草山荘、今田地域の小野原荘、市原荘等が存在した。このうち、後河荘(後川地区)は東大寺維持の為に成立した本市で最も古い荘園といわれる。また、波々伯部保は京都祇園社(八坂神社)の荘園で、当地の田堵13人が共同して先祖相伝の田地を祇園感神院へ寄進して、11世紀末に成立した。また、東寺領大山荘と近衛家領宮田荘については、水利権等をめぐって度々相論を起してきたことが古文書等により確認されており、当時の荘園の状況をあらわす貴重な事例である。

これらの荘園領域は、山城・居館を中心とする武士の支配や惣村の成立による村落社会の形成、篠山藩による農民支配、近代行政区分としての村の領域など、中・近世、近代を経て現在の農村集落の形態に受け継がれているものも多い。

南北朝期には、丹波国の守護に、仁木氏や山名氏が就任しており、仁木氏の一族は福住地区の仁入道山を本拠(仁木城)とし、戦国時代まで居城していたとされる。また、幕府の実力者となっていた山名氏清が守護であった時期は、その子息である山名(宮田)時清、氏明が、板井城等に居城し、宮田荘から曾我部荘一帯を本拠としていたともいわれる。明徳

2年(1391)の明德の乱、応仁元年(1467)から文明9年(1477)の応仁・文明の乱の間、土豪の波々伯部氏、内藤氏らが中央権力と結んで活躍し、勢力を伸ばしたが、小土豪の割拠に終わり、独自の有力者は成長しなかった。

明德の乱で山名氏が衰退した後、細川氏が丹波守護となり、細川氏一族が丹波に勢力を広げる。細川氏の被官となっていた石見国出身の波多野氏は、各地で戦功をあげ、多紀郡を与えられ、既に“市”が形成され多紀郡の拠点となっていた八上の地に入った。その後、波多野氏は、細川家の内紛に乗じて、大芋荘の押領をはじめ、寺社領・禁裏御料所を蚕食し、年貢の押領などを行なって次第に勢力を強めた。波多野氏は高城山の西南山麓に蕪丸(奥谷城)を築き、元清の代に細川氏の有力被官香西・柳本両氏と結び、細川高国、守護代内藤貞正らを背景にして、郡奉行難波氏を八上から放逐し、永正5年(1508)に朝路山山頂に八上城を築き高城と号した。なお、多紀郡における城下町などの“町”の起源は、高城山(朝路山)山麓の奥谷に城下町(殿町周辺)が形成されたことにはじまるとされている。八上城は明智光秀によって3年間にわたり包囲され、天正7年(1579)6月、城内の和平内応派を利用する計略にかかって落城し、波多野氏は滅亡している。なお、戦国時代の多紀郡では、中沢氏(大山城)や酒井氏(油井城・高仙寺城)、波々伯部氏(淀山城・東山城)、畑氏(八百里城・奥畑城)、靱井氏(靱井城・安口城)、荒木氏(細工所城)、小林氏(沢田城)、渋谷氏(飛の山城)、大芋氏(豊林寺城)、小野原氏(木津城)、細見氏(草山城)等の勢力が確認される。

その後、丹波国は亀山城(京都府亀岡市)を築城した明智光秀により支配され、明智氏の一族が八上城に入り、多紀郡一帯を統治した。さらに、本能寺の変、山崎の合戦を経て、豊臣秀吉が天下統一をなした後、秀吉の蔵入地となり、八上城には大坂より代官が在番した。また、全国規模でいわゆる太閤検地が行なわれたことにより、多紀郡においても、天正15年(1587)片桐且元らによって郡内総検地が実施された。この検地により村の領域等が明確化され、100以上の“村”が成立しているが、この時の村が現在の町字に近い区域と考えられている。

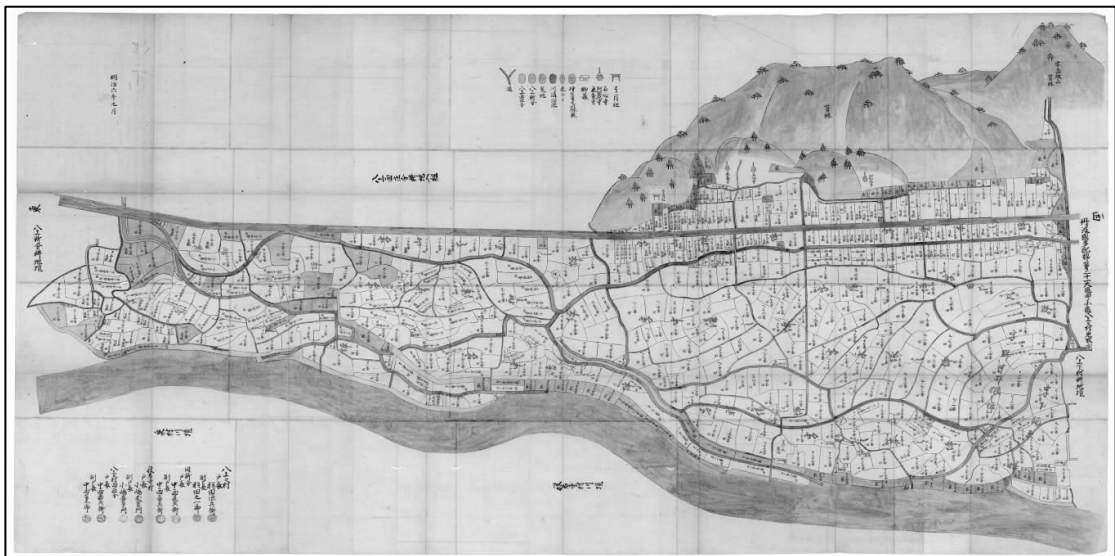


図 2-10 「八上上」地籍図 (丹波篠山市所蔵)

### (3) 近世

慶長7年(1602)、丹波亀山から前田主膳正茂勝が八上藩5万石の領主として入城し、城下町(八上内周辺)の整備が進められたと考えられている。

慶長13年(1608)、徳川家康は実子とされる松平康重を常陸国(茨城県)笠間城から八上城に転封させ、西国諸大名に対する抑えの拠点として新城の築城を命じた。慶長14年(1609)、西国15ヶ国20大名を動員する天下普請によって、わずか9ヶ月で、小丘陵である笹山を利用した平山城が完成している。

築城の翌年正月、康重は岡田重綱を地割奉行に命じ、城下町の建設にあたらせた。城の周囲に武士の屋敷地が配され、その外側に城下町を貫くように京街道(近世の山陰道)が引き込まれ、街道沿いに町人地が配された。また城下町の入口や要所には寺院が配された。

笹山藩は、多紀郡のほぼ全域と、隣接する丹波国桑田郡、摂津国嶋下郡、兎原郡の一部の5万石を領していた(後に青山氏が6万石に加増される)。以後、松平三家八代、青山家六代により笹山藩は継承され、明治時代以降も続くまちの空間的骨格及び経済的基盤を形成した。

旧笹山町域では、米作を中心に雑穀などによる自給自足的農業が行なわれ、地主層だけは蚕糸業や酒造業を営んでいたが、一般農民は冬の農閑期の100日間は池田、伊丹、灘五郷へ酒造出稼ぎに行き、かなりの現金収入を得た。しかし、領内の労働力の不足や労賃の高騰をきたすことから、地主手作層は連年藩に働きかけて規制を続けた。

笹山藩では、大坂商人大津屋源兵衛に商品の一手販売を請け負わせるための座を設け、焼物窯運上定納銀71匁ないし111匁を納めさせ、殖産興業政策を推進した。宝暦2年(1752)からは登り窯を釜屋、立杭の場所に移し、里窯をはじめた。座も藩の直営となり、座方役所を建て、製法も「こし土」の普及と白釉、鉄釉が発達したことから、日用雑器から御用絵師渡辺寛柔の手になる名品まで多岐にわたる製品がつくられた。

### (4) 近現代

明治維新を迎え、青山家の笹山藩領は行政区域として笹山藩となった。明治4年(1871)の廃藩置県により、笹山藩は笹山県となり、その後、柏原県や出石県とともに豊岡県に編入され、明治9年(1876)には現在の兵庫県に再編された。

大正4年(1915)に笹山口と城下町の北西にあった歩兵第70連隊を結ぶために笹山軽便鉄道が敷設されたが、その後、「笹山鉄道」に改名され、昭和19年(1944)に国鉄笹山線(現在は廃線)が開通すると同時に廃線となった。戦後、連隊跡地は、県立笹山農業高校(現・県立笹山産業高校)や県立兵庫農科大学(神戸大学農学部に移管の上、移転)などが立地した。

また、本市は従来農林業などの第一次産業を基盤としてきたが、昭和30年(1955)の合併後、当時の笹山町、城東村、多紀町において「工場誘致条例」が制定され、積極的な企業誘致が行なわれ製造業を中心にその成果を上げてきた。昭和40年代後半以降は、酒造工場の進出が活発化し、“丹波杜氏”の名は広く知られている。

昭和 30 年(1955)、町村合併促進法により、篠山町、八上村、畑村、城北村、岡野村が合併して「篠山町」、日置村、雲部村、後川村が合併して「城東村」、南河内村、北河内村、草山村が合併して「西北村(その後、西紀村と改称)」、福住村、村雲村、大芋村が合併して「多紀村」、大山村、味間村、城南村、古市村が合併して「丹南町」が誕生し、これに今田村をあわせ、多紀郡は 2 町 4 村となっている。昭和 35 年(1960)、町制施行により「城東町」、「西紀町」、「多紀町」、「今田町」となり、多紀郡は 6 町となった。

昭和 49 年(1974)の 5 回目の合併協議会が不成功だったことを機に、篠山町、城東町、多紀町の 3 町合併の気運が高まり、昭和 50 年(1975) 3 月、新制「篠山町」が誕生した。その後、平成 4 年(1992) 8 月の多紀郡議会議員研修会において、改めて 4 町合併の問題が提起され、合併協議会による協議を経て、平成 10 年(1998) 4 月に 4 町長によって合併協定が調印された。同年 12 月に施行された「合併特例法(市町村の合併の特例に関する法律)」の一部改正によって、人口 4 万人以上での市制施行が可能となり、平成 11 年(1999) 4 月、4 町が合併し「篠山市」が誕生した。

その後、篠山市の市名を「丹波篠山市」に変更することについて、平成 30 年(2018)11 月 18 日に「市名を丹波篠山市に変更することについての賛否を問う住民投票」を執行した結果、賛成多数となったため、同年 11 月 27 日に臨時議会を招集し、市名を変更する条例案を提出し、賛成多数により可決された。条例施行日である令和元年(2019) 5 月 1 日をもって、市の名称を篠山市から「丹波篠山市」に変更した。

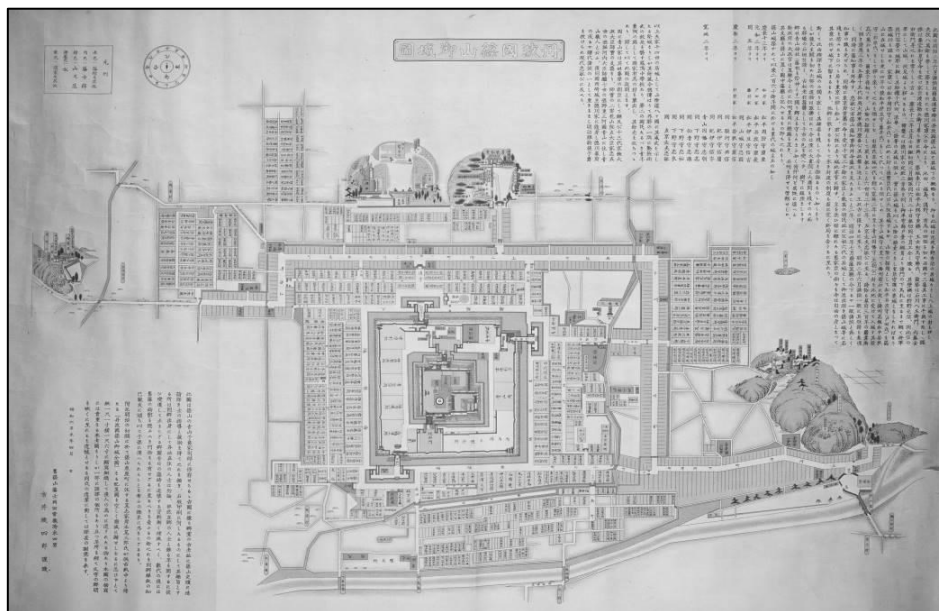


図 2-11 明治 2 年(1869)当時の城下町を描いた「丹波国篠山御城絵図」(昭和 6 年)

## 4. 歴史文化まちづくり資産

### (1) 指定文化財等

丹波篠山市には、令和3年(2021)3月現在で、合計224件の指定等文化財がある。文化財の種別ごとでは、建造物が57件と最も多く、彫刻36件、工芸品23件、遺跡17件となっている。また文化財総合把握調査により、指定等文化財の他に令和2年度(2020)時点で合計4,610件の未指定の歴史文化まちづくり資産が把握されている。



図 2-12 指定等文化財の位置

## (2) 日本遺産の認定

丹波篠山市は、『丹波篠山 デカンショ節—民謡に乗せて歌い継ぐふるさとの記憶』（地域型）と『きっと恋する六古窯—日本生まれ日本育ちのやきもの産地—』（シリアル型）の2件のストーリーが日本遺産に認定されている。

このうち『丹波篠山 デカンショ節—民謡に乗せて歌い継ぐふるさとの記憶』は、平成27年(2015)4月21日に、日本で第1号となる日本遺産に認定された。その概要は以下のとおりである。

かつて城下町として栄えた丹波篠山の地は、江戸時代の民謡を起源とするデカンショ節によって、地域のその時代ごとの風土や人情、名所、名産品が歌い継がれている。地元の人々はこぞってこれを愛唱し、民謡の世界そのままにふるさとの景色を守り伝え、地域への愛着を育んできた。その流れは、今日においても、新たな歌詞を生み出し新たな丹波篠山を更に後世に歌い継ぐ取組として脈々と生き続けており、今や300番にも上る「デカンショ節」を通じ、丹波篠山の街並みや伝統をそこかしこで体験できる世界が展開している。

なお八上城跡は、この『丹波篠山 デカンショ節』の日本遺産構成文化財15件のうちの1件に認定されており、その概要は以下のとおりである。

デカンショ節「島と浮かぶよ 高城山が 霧の丹波の 海原に♪」と歌われる八上城跡は、高城山に本城があり、織田方の明智光秀による丹波攻略の主戦場として、また近接する近世城郭篠山城と対比する城として日本城郭史上貴重な遺構となっている。

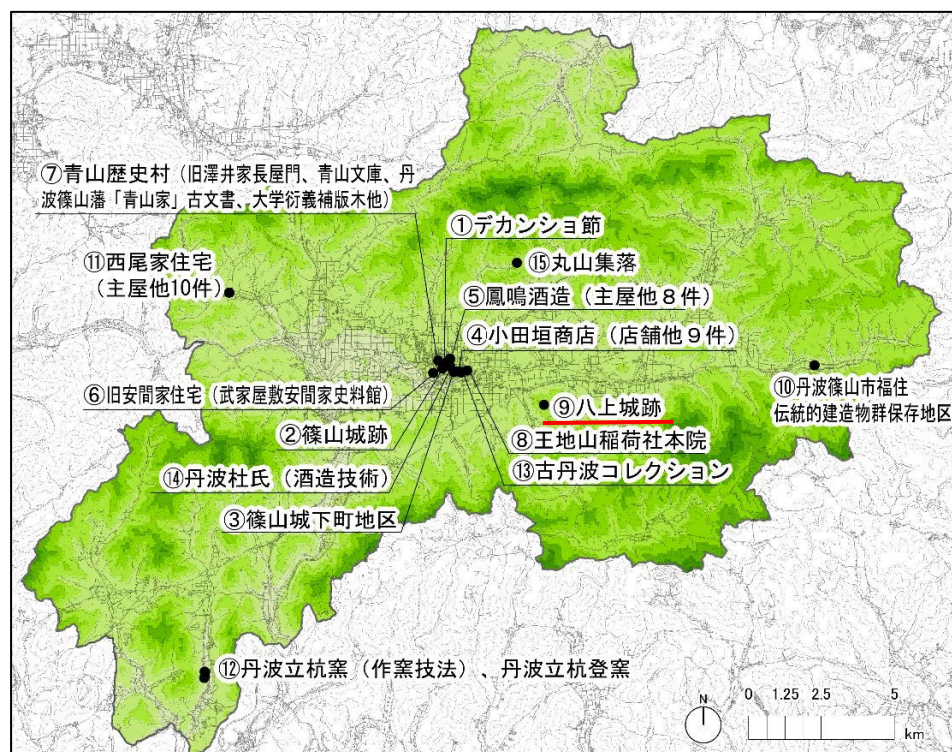


図 2-13 日本遺産構成文化財の位置(丹波篠山デカンショ節)

資料：日本遺産ポータルサイト(文化庁)、構成文化財の詳細より一部加筆

次いで、平成 29 年(2017) 4 月 28 日には、古くからやきものの産地として名高い 5 市町(越前町、瀬戸市、常滑市、甲賀市、備前市)とのシリアル型(ネットワーク型)で申請したストーリー『きっと恋する六古窯ー日本生まれ日本育ちのやきもの産地ー』が日本遺産に認定された。その概要は以下のとおりである。

瀬戸、越前、常滑、信楽、丹波、備前のやきものは「日本六古窯」と呼ばれ、縄文から続いた世界に誇る日本古来の技術を継承している。日本生まれ日本育ちの、生粋のやきもの産地である。中世から今も連綿とやきものづくりが続くまちは、丘陵地に残る大小様々の窯跡や工房へ続く細い坂道が迷路のように入り組んでいる。恋しい人を探すように煙突の煙を目印に陶片や窯道具を利用した塀沿いに進めば、「わび・さび」の世界へと自然と誘い込まれ、時空を超えてセピア調の日本の原風景に出会うことができる。

### (3) 未指定の「歴史資産」

文化財総合調査により、令和 2 年度(2020)時点で、合計 4,610 件の歴史文化まちづくり資産が把握されている。平成 22 年度(2010)から令和 2 年度への歴史文化まちづくり資産の変化をみると、茅葺民家や茅葺民家・茅葺門、盆踊り等の減少により 332 件が消失している一方で、年中行事や石造物、遺跡等の 273 件が追加されている。

### (4) 歴史文化の特徴

丹波篠山市は、京都の教王護国寺や摂津の住吉大社などの寺社や貴族により開発された中世荘園を基盤として、近世には、「城下町」、「街道集落」、「農村集落」が有機的に関連しながら成立してきた都市である。「城下町」は天下普請により築城された篠山城の城下に領内の町場から商職人の移動や寺院の移転によって町が形成され、「街道集落」は農村を母体として京街道などの街道筋に交通・流通の要衝として発展し、「農村集落」は黒大豆や茶の栽培などの展開をみせながら農村としての性格を維持し続けてきた。このように、近世の 3 つの集落形態が相互に関係しながら共存し、それぞれの集落で形成された特徴的な景観が、近代から現代まで社会的環境が大きく変化するなかでも継承されている。

丹波篠山市では八上城跡や篠山城跡などの城跡、古墳や集落遺跡、社寺建築や茅葺民家などの歴史的建造物、仏像や石仏、丹波焼の登り窯など様々な歴史文化まちづくり資産が残されているだけでなく、祭礼行事などの無形の歴史文化まちづくり資産も現在まで受け継がれている。さらに、近世から継承されてきた集落の景観、農地や山林などの豊かな自然環境が一体となって、「日本の原風景」とも言える丹波篠山市固有の風景が形成されている。

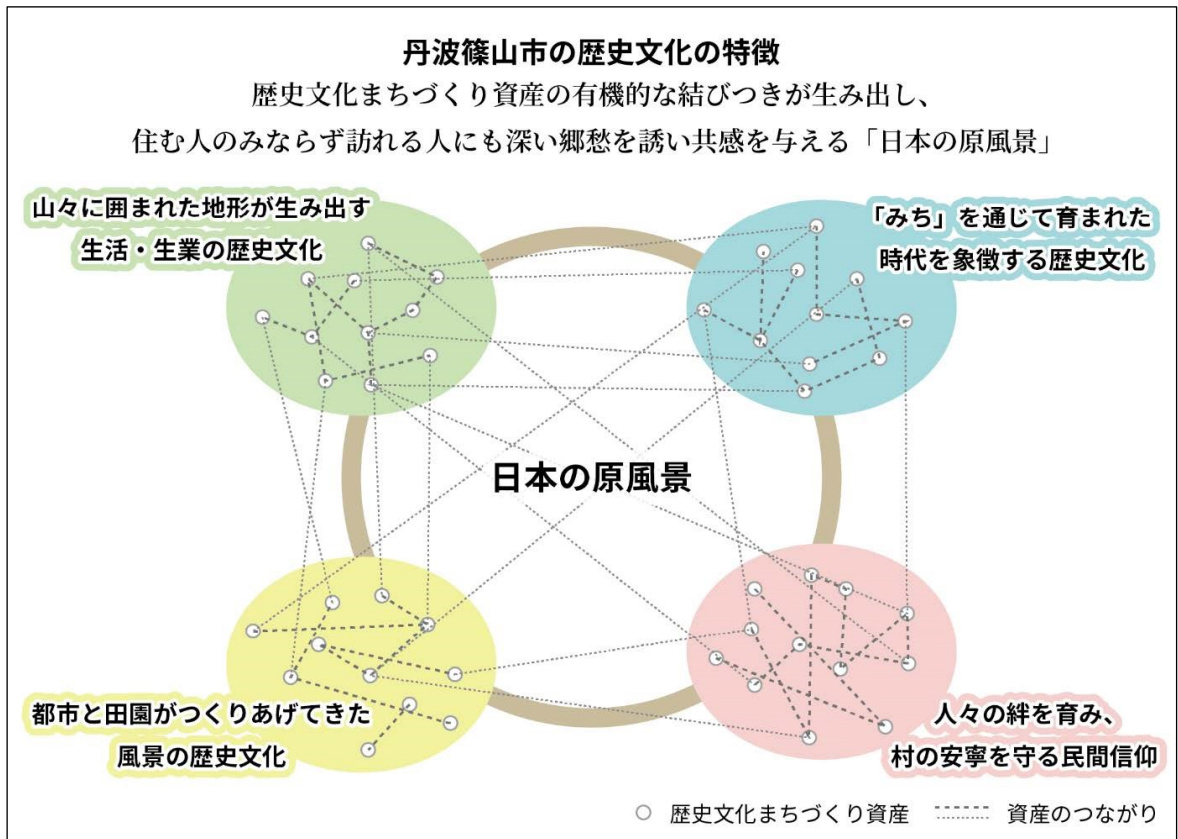


図 2-14 丹波篠山市の歴史文化の特徴  
資料：丹波篠山市文化財保存活用地域計画